

四国特集

山崎技研

▽所在地＝高知県香美市土佐山田町テクノパーク2番  
▽代表者＝山崎道生・代表取締役会長  
▽URL＝https://www.yamasakigiken.co.jp/

山崎技研は工作機械メーカーでありながら、マダイ、シマアジ、ブリ等の養殖用稚魚の孵化、成育、販売も行うという特色を持つ企業である。

1948年の創業時には、燃費が良く安定した4サイクルエンジン原動機付自転車「ブルーボード」を開発し、その後、船外機、変速機を経て、現在では金属をマイクロ単位の高精度で削ったり穴をあけたりする工作機械「フライス盤」や「マシニングセンター」の専門メーカーへと成長した。特にコンピュータ制御可能な「NCフライス盤」の売上は国内シェアトップを誇る。

創業者の山崎圭次氏は本田技研創業者の本田宗一郎氏と特許出願数を競い合ったほどの発明家であったが、「人間に威圧感を与えるような機械ではダメ。人に好かれる、美しい機械。温かく、色気があった、しかも稼働率のいい機械」を目指していたという。2代目の山崎道生・代表取締役会長も「技術が生む使い勝手の良さ」を強調した。こうして登場した同社の機



山崎技研社屋全景

械は高精度と誰でも使える汎用性の高さから、顧客の高い信頼を得ている。同社では製造開発面だけでなく、営業も、修理担当のサービスタッフを兼務させ、アフターフォローを行う「お人好しの営業」を心掛けてきているという。

同社のもうひとつの顔である水産事業が開始されたのは1972年。この頃、景勝地桂浜で知られる浦戸湾は工場排水により汚染され、瀕死状態にあった。創業者の山崎圭次氏は抗議の声を上げるとともに、豊かな自然を取り戻すべく東奔西走。水産事業部はこの時の「環境汚染と獲り過ぎで魚がほとんど減っている。自分たちで食べる分ぐらい、自分たちで作ろう」と言う山崎圭次氏により開設された。同社はいまでも「人と自然の共存共栄」「人にやさしく自然にやさしく」をモットーとしている。企業理念も「人と自然・技術とロマ

ン 共に未来を創る」である。通常の養殖業と異なり、「魚を増やすこと」を目的としているため、黒字化したのは13年後だった。いまではクロマグロの養殖で有名な近畿大学とマダイ、シマアジ稚魚では出荷尾数で国内

トップを争うほどになっている。山崎道生氏は、水産業でも1年中同じサイズ、同じ品質、同じ味の工業製品と同じ水準が求められると話した。

クロダイ、メジナ、イサキ、ノコギリガザミなど無償の稚魚放流も行っている。放流された稚魚は累計で1千万尾以上に上っており、毎年実施している稚魚放流イベントは子供たちに大人気のため、毎回応募は

公開からわずか30分ほどで満員になるという。このほか、農家の人手不足に対応し、施設園芸のししとろの袋詰め機械の開発を行ったたり、高知工科大学ロケットサークルが開発する手作りロケットの部品加工を行ったりもしている。

「『人にやさしい商品』を」と言っておきながら、社員が夜遅くまで働いているのは本末転倒ではないか」とも山崎氏は話す。そのスチンスから、育休の取得を推奨。女性社員はもちろん、男性社員の育休取得率も100%に達しているという。

今後の事業について、山崎氏は「工作機械は大型化のニーズが拡大するだろう。当社は量産ではない半ば手作り状態なのが、顧客にとっての使い勝手の良さ、便利さが魅力である。輸出は米中貿易摩擦の影響で急減しているが、海外向けの機械の製造・販売は引き続き強化していきたい。水産事業は基本的に国内で展開を続ける。立地が難しいが、工場が少なく、きれいな波の穏やかなところで、日差しがあって暖かい海がベストだ」と述べた。

最後に、今後の社会のあり方についても、持論を展開。「AIやIoTなど技術の進展で職や雇用が失われるという話もあるが、私たちはそのようなものに流されるのではなく、自らの生き方をきちんと選び取っていかないとけない。資本主義と民主主義は同じものではない。私たちはお金の論理ばかりに目がいて、心の問題を忘れていのではないか。『金儲けさえすればいい』という考えは間違いだ。私たちは素朴な人間らしい生活を取り戻さなければならぬ」と訴えた。

人と自然を愛し、未来を創る